備後神辺城主杉原盛重

森本　繁

神辺城と山名理興

杉原盛重は山陽道備後神辺の城主であるが、その名はむしろ山陰の武将として有名である。これは、杉原盛重が毛利氏の支配下にあって、そのほとんどの生涯を山陰経略に捧げたからである。毛利氏の出雲経略が熾烈化した、永禄7年から天正9年にかけて、杉原盛重は伯耆尾高の泉山城主であった。したがって、その最期も天正9年12月25日、雪まじりの寒風が激しく日本海から吹きつける伯耆の八橋（やせば）城内においてであった。羽柴秀吉による本格的な因幡攻撃が始まって凡そ半年後のことであり、吉川経家の鳥取城は、ちょうどその2ケ月前に落城している。

杉原盛重の享年も、正確な生年月日もわからない。天正9年（1581）に病死したときは、60歳に達していたであろうから、恐らく大永元年（1521）頃の生まれであろう。そのかれが備後神辺城の城主となったのは弘治3年（1557）、神辺城の先代山名理興が病没してからだ。したがって、盛重が大永元年の生まれであるとするならば、このとき既に36歳になっていたことになる。

『西備古城記』（元禄8年調）によると、神辺城の初めは建武2年11月16日で、備後国の守護としてやって来た浅山備前守（朝山次郎左衛門尉景連）が、紅（黄）葉山に築城してからだ。その後、備後国守護としてこの地を支配したのは、細川、渋川、今川、山名の諸氏であり、特に山名氏は応永8年（1401）から天文7年（1538）まで137年間も備後の守護をつとめている。

だが、神辺城主として杉原盛重の先代山名理興は、この山名氏ではない。永正年間（1504—21）から天文年間（1504—56）にかけてこの地に勢力を伸ばして来た周防の大内氏と出雲の尼子氏との勢力の狭間で、尼子氏の支配下に入った山名氏の神辺城を、大内氏へ奪い取るために活躍した杉原一族である。

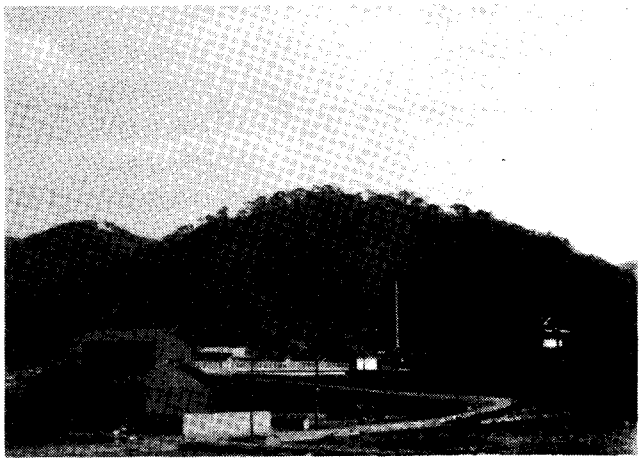
杉原氏は備後生え抜きの国人衆といわれるが、毛利氏や小早川氏と同じように、鎌倉時代の初期に関東から下って来た西遷地頭の一族であったようだ。室町期から戦国時代にかけて府中の八ツ尾山に本拠を置き、その勢力は備南各地に及んだ。杉原理興はその一族の子孫で、八ツ尾山城の出自である。①

当時神辺城は、尼子方の山名忠勝が山名氏惣領家の祐豊が派遣していた守護代太田垣氏を攻めて、これを占拠していたため、周防の大内義隆が杉原理興に命じてこれを攻略させた。城が落ちたのは天文7年（1538）である。新しく神辺城主となった杉原理興は、このときから山名の姓を僭称することになる。

さて、この山名理興が、大内氏の支配下から尼子氏へ鞍替えしたのは天文12年からである。それまで山名理興は、天文9年9月に大内配下の毛利氏が尼子氏によって吉田郡山城を包囲されて苦境におちいったとき、陣中見舞の使者を郡山城に派遣しているし、天文11年に大内義隆が出雲遠征に出陣したときも、その配下にあって富田城攻略の一翼をになっている。

ところが、天文12年になって大内軍が富田城攻略に失敗して敗走を始めると、たちまち理興はこの大内氏を見限って尼子氏に寝返った。この時期、備後の山内氏や宮氏も安芸の吉川氏も大内氏を見限っているのだから、杉原氏がこの時流に乗ったとしても責めるのは酷である。

しかし、そのため山名理興は、それ以後、執拗な大内氏の攻撃に6年間も苦しむことになる。宿敵尼子氏との対抗上、大内氏が山陽



備後神辺城跡

道のこの重要拠点を無視する筈がないのである。大内軍の神辺城攻撃は、早くも天文１２年の６月から始まった。

勿論、尼子晴久も、この神辺城を救援するために翌年になって軍勢を南下させたが、備後における大内方国人衆三吉氏や上山氏が、安芸の毛利氏と共にこれを阻んでいる。

神辺合戦と杉原盛重

杉原盛重の名が初めて戦記にあらわれるのは天文１６年から翌１７年にかけてである。

神辺城を狭んで備後北部と瀬戸内沿岸部を押えた大内氏は、この頃になって本格的な総攻撃を開始したが、その攻撃に対抗して神辺城に立籠ったのは杉原盛重・藤井皓玄・木梨興勝・所原肥後守・大江田隼人介ら総勢一千余騎であった（西備名区）。また、義隆は天文１７年６月、陶隆房に防長の手勢五千を与えて備後制圧に乗り出し、隆房は毛利元就をはじめ吉川元春・小早川隆景・宍戸元源・平賀隆宗・香川光景らの安芸国人衆を率いて、総勢一万六千余騎で神辺城下に押し寄せたが、このとき神辺城兵の先頭に立ってめざましい活躍をしたのが四番家老の杉原盛重であった（備後太平記）。

ちなみに、このとき吉川元春は１９歳の若武者であったが、神辺方の杉原盛重と同様にめざましい働きをして敵味方を驚かしている。英雄は英雄を知るというが、後年吉川元春が山名理興の亡きあと、その後任として盛重を推挙したのは、このときの盛重の活躍を自分の網膜に焼きつけたからであった。

その後、神辺城は一進一退を続け、膠着状態におちいったので、陶隆房は味方を集めて軍議を重ねた結果、平賀太郎左衛門隆宗に後事を託して備後から撤退することにした。

すなわち『備後太平記』は、

「評論様に有りし所に、傍より平賀太郎左衛門隆宗、陶隆房に向ひて申しけるは、予、忠興（理興）とは数年遺恨有り。其子細は芸州の知行の外に、大内より備後の内、春部の庄を加増に賜はる。吾れ彼の春部の庄に城を築き居城とす。其時、我に無躰の行迹忘れがたく、渠が所領尽く予に賜はりなば、一身の智略を以て此の城を責め落し、忠興が首を討ち取って御上覧に備へ申さん、哀れ望みに任せ下さるべしと願ひければ、陶隆房を始め満座一同に望む所なれば、頓て領掌の望みに任せ給へば、平賀大いに悦び、直に向ひ城を願ひければ、隆房則ち総陣へ人夫を出さるべしと触れ廻し、頓て城を形の如く築きければ、其時に渡辺源六を添へられ、都合其勢八百余騎を師いて五ケ手島に楯籠る」

しかし、この隆宗の意気込みにもかかわらず、かれの生存中、神辺城は落ちなかった。神辺城が落ちて城主の理興らが出雲富田へ逃亡したのは天文１８年９月４日であるが、隆宗は２ケ月前の７月３日に病死しているからである。神辺城は、隆宗を亡くした兵士たちが、主君の弔い合戦によって落とした。落城後、杉原盛重も、一族と共に出雲へ逃れたと思える。

毛利氏と杉原氏

神辺城が落城したあと、間もなく安芸備後の政治地図は大きく塗り変えられた。天文２０年の８月に叛旗をひるがえした陶隆房（晴賢）が、９月１日に主君大内義隆を自刃させて、それまで大内配下にあった毛利氏が、自立への道を歩み始めたからである。

天文２３年５月、毛利氏はついに陶晴賢と断交して、９月１５日に折敷畑で陶軍を潰走させた。それまで尼子氏の支配下にあった山名理興が、尼子氏から毛利氏に乗り換えるのは、この合戦の後と思われる。尼子氏では当主の晴久が元就の謀略にかかって新宮党を滅ぼし、その軍事力を半減させたから、機を見るに敏な理興は、尼子氏の斜陽を決定的なものと考えたわけだ。

理興はひそかに盛重を使者として元就のところへ送り、毛利氏への帰属を願い出た。もとより、これから大事な陶氏との決戦をひかえた元就に、この申し出は渡りに舟というところである。元就は理興の申し出を許して、再びかれを神辺城主とした。恐らく、その時期は年が明けた天文２４年（1555）の春頃のことであろう。弘治元年（1555）９月１日の厳島合戦に、理興配下の人物と思える杉原若狭守が、毛利方として出陣しているからである。

神辺城主に帰り咲いた理興は、それを機に山名氏から本姓の杉原氏にもどり、毛利氏の備中進攻の第一線に立とうとしたが、病いのため、弘治３年（1557）３月５日に死亡した。理興には嗣子がなかったので、このあと家督相続の問題が毛利氏との間で協議された。

元就は備後の国人衆を自分の味方につけておくために、神辺城主の後嗣を杉原一族の中から選んだ。諸将に意見を求めると、先ず小早川隆景が、杉原家の筆頭家老であった杉原興勝を推挙した。興勝は人格も円満であり、武勇にも勝れている。ついで吉川元春が、その武勇抜群を理由に四番家老の杉原盛重を推した。先年来の盛重の武功を目の当たりにした元春にとって、この男こそ今後の対尼子戦において、かけがえのない戦力となると考えたからだ。

だが、温厚な隆景の眼に、この男は粗暴で危険この上ない人物としか映らなかった。「盛重は乱暴者で、人を生きたる虫ほどにも思わず、その上、常に博奕をたしなみ、自己の強剛を誇って、危い合戦にも強引に仕かけるような人物である」というのが、隆景の盛重に対する人物評である（陰徳太平記）。

小早川隆景にとって、この盛重が危険この上ない人物と思えたのは、かれが特異な家臣団を抱え込んでいることにも原因があったようだ。盛重はその下級家臣団に、忍者や山賊・海賊あがりの者共を多数採用し、合戦の場合には巧妙な戦術を展開して、人の意表をついている。

山手銀山城址
理興の４番家老時代盛重が居城した

『陰徳太平記』の記述をかりれば、杉原盛重の軍団は「元来盗賊を業として世を渡りける奴原なりければ、敵城敵陣に夜討忍討をかけ、或は火を付け、又は十重二十重に取り巻きたる所を易々と忍びて通路しける故、盛重敵の隙を闖（うかが）ひ、重城を陥れ、堅城を挫（とりひし）ぐ事、員（かず）を知らず」というわけである。

しかし、世の中が平和な時代ならいざ知らず、物騒な戦国時代においては、むしろこのような用兵の妙は、毛利軍にとって願ってもない軍事力の強化となる。元就は元春の主張を容れて、この男を神辺城の城主とした。

伯州の神辺殿

神辺城主となった杉原盛重が、推薦者吉川元春の期待を裏切らず、その勇名を遺憾なく発揮した戦闘は、永禄元年（1558）の２月から３月にかけての出羽(いずは）合戦である。

永禄元年２月上旬、吉川元春は父元就の命を受けて、いよいよ石見遠征に乗り出したが、そのとき２月２７日から始まった石見出羽の合戦で、劣勢にあった毛利軍を優勢に好転させたのが、この盛重であった。

盛重はこのとき１ケ月前に神辺城主になったばかりであったが、吉川元春の石見遠征を聞くと、手勢八百を率いて、夜を日についで出羽表に駈けつけた。戦場に着いてみると、劣勢にあった吉川軍は本庄常光や小笠原長雄の軍勢に追い立てられて、気息奄奄の体である。その吉川軍が三ツ巴の旗をなびかせて本庄軍の横手から攻め込む杉原盛重の軍勢を見て、俄然息を吹きかえしたというから、いかに盛重の用兵が妙であったかがわかる。

盛重が戦略家として、たしかな眼力を持っていたことは、やはりこのときの戦場で発揮された。かれは小笠原長雄の配下にあって出羽の北西にある日和城を守っていた寺本玄蕃を吉川元春に進言して毛利方に服属させている。かれが、この寺本という人物の性格を見抜いたからである。

杉原盛重が、伯州の神辺殿として伯耆尾高の泉山城主となったのは、永禄７年（1564）の末である。その前年の白鹿城攻めで、かれが抜群の戦功をあげていたので、その戦功に対する報奨の意味もあってのことであろう。

尾高泉山城は、現在の大山有料道路の入り口付近にあった居城だが、そこに当時、山陰道の東西を結ぶ出雲街道が通っており、また伯耆南部と備後をつなぐ物資の輸送路も通じていた。したがって、この尾高は交通上の要地であり、ここに軍事上の拠点である泉山城を設けることは理の当然であった。

尾高泉山城は、それまで行松左衛門尉正盛の居城であったが、正盛が永禄７年の１２月に中風にかかって急死したので、杉原盛重が代ってこの城主となったわけだ。病死した正

尾高泉山城跡

盛には、美貌の妻との間に徳若、松千代という二人の男子があった。しかし、未だ幼少である。終局に近づいた毛利氏の対尼子戦で、戦略上の重要拠点であるこの尾高を、行松氏の家臣団に委せておくことは、極めて危険なことであった。そこで、吉川元春が父元就に進言して城主にしたのが、この盛重であったというわけである。「杉原盛重を行松の後家と結婚させ、子息の成長するまで尾高城に在城させれば、伯耆一国の静謐はもとより、因幡・但馬のあたりまで盛重の武威に服することになろう」(陰徳太平記)というのが、元春の主張であった。元春がいかに盛重を高く評価していたかがわかる。

かくして、盛重は伯耆尾高で泉山城と美貌の熟女とを手に入れたわけだが、この行松の後家はかれの正妻ではない。盛重は既に永禄元年正月、神辺城主となったとき、先代山名理興の妻を自分の正妻(後妻)として元就から頂戴している。

理興の妻は元就の姪(めい)であった。すなわち元就の兄興元の娘で、大永3年(1523)に9歳で夭逝した幸松丸の姉である。②
この女性は毛利氏の政略結婚の犠牲にされた薄幸の女性で、初め備後甲山城の山内豊道に嫁し、豊道の死後、今度は竹原の小早川興景に再嫁した。ところが、この興景も天文13年(1544)に安芸佐東で陣没したので、毛利家に帰され、弘治元年(1555)になって山名理興が毛利氏に帰順したとき、元就はこの女性を三たび神辺城へ嫁がせている。仮にこの女性を弟の幸松丸と一つの年上の姉としても大永3年当時10歳として、弘治元年には既に42歳である。そして、弘治3年3月5日に彼女が3番目の夫を亡ったときには44歳であるから、この女性が4番目の夫である盛重に嫁いだときには45歳であったという勘定になる。前にも述べたように、このとき盛重も既に30数歳には達していたであろう。

その盛重が、6年を経て、2人の子持ちとはいえ、世にかくれなき美貌の熟女を手に入れたのである。今になっては、かれの複雑な心裏をうかがうすべもないが、少くとも、かれがこれを不満に思っていなかったことだけは事実のようだ。その後のかれの毛利氏に対する献身的な働きぶりを見れば、どうしてもそのように思えてくる。

尾高泉山城に居を移したあとの備後神辺城には、盛重の子息弥八郎元盛と又次郎景盛とが留守居として置かれ、城代には所原肥後守が任命された。また泉山城内における行松派と杉原派の家臣団の対立は、家臣に安逸を許さない盛重の戦闘的指導力によって、巧みに統御された。

鹿介と盛重

杉原播磨守盛重と山中鹿介幸盛との宿命的な対決は、盛重が尾高泉山城主となって間もなく、永禄8年の春から始まった。富田月山城への物資補給路争奪をめぐる弓ケ浜合戦である。

当時、毛利軍に包囲された富田城内への物資補給ルートは、弓ケ浜半島から中海を経て飯梨川をさかのぼる海上ルートと、伯耆の日野川をさかのぼって江府の江尾へ陸上げし、そこから山狭の道を運ぶ陸上ルートと、二つしかなかった。毛利氏が杉原盛重を尾高の城主に任命したのは、この二つの物資補給路を分断させるためである。

そこで、富田城の尼子方は、この切断された補給路を回復するため、山中鹿介幸盛以下立原源太兵衛・森脇市正・本田豊前守などの武将を派遣して、美保関から弓ケ浜を経て尾高に及ぶ地域の奪還を図った。先ず美保関を奪取した尼子軍は、そこを根拠地として弓ケ浜に兵を進め、さらに尾高城を攻撃しようとしたのである。

このとき、盛重は城兵千五百を率いて弓ケ浜半島へ出陣し、巧みに敵を尾高城下へ誘い込んだあげく、寡兵をもって味方に倍する敵軍を撃破している。このときからあと、山中鹿介が杉原盛重と対決するいずれの戦闘にお

いてもそうであるが、いかなる鹿介の戦術をもってしても、この盛重にだけは歯が立たなかったのである。

そういう意味でわたしは、悲劇の英雄山中鹿介幸盛を云々する場合には、先ずその好敵手としてかれの前に立ちはだかり、戦闘においてことごとくかれの野望をくじいた杉原盛重の軌跡を、この幸盛との関連で今一歩追求してしかるべきだと思うのである。通常、鹿介幸盛に配する毛利方の武将としては吉川元春があげられるけれども、元春は将に将たる人物であって、幸盛は所詮兵に将たる忠勇な武将にしか過ぎない。その意味では元春配下の杉原盛重こそ、この幸盛に配する人物として最もふさわしいとわたしは思うのだが、どうであろうか。このあと盛重は、元春の命を受けて、尼子家再興を夢みて執拗な反撃を試みる鹿介を随分と苦しめている。鹿介と盛重とが互いに敵意を燃やしたことは、『陰徳太平記』の「盛重鹿之助は敵ながらも昔より勝れて半（なか）悪しう候」という記述によってもうかがえる。

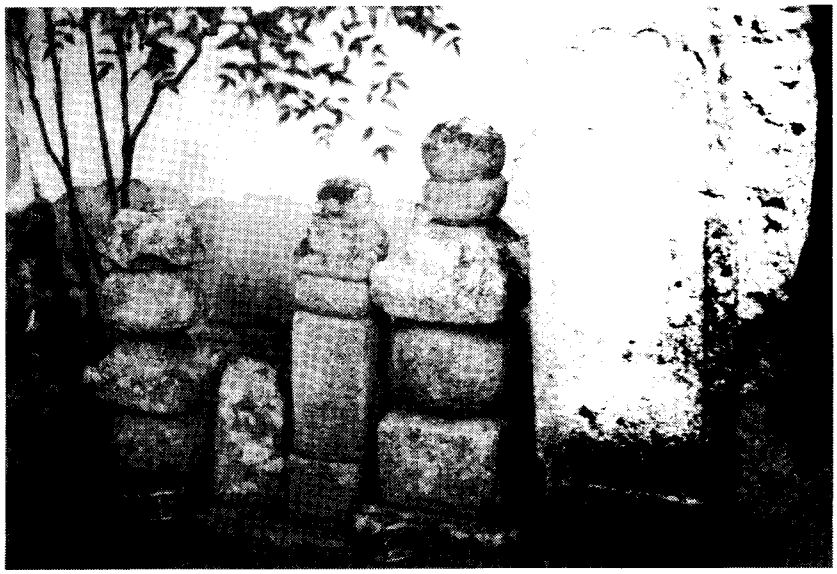
永禄8年8月、盛重は元春に命ぜられて日野川の上流をさかのぼって江美城を攻め、城主蜂塚右衛門尉を自刃に追いやって、尼子氏の陸上補給路を断った。そのため、富田月山城は翌永禄9年（1566）11月に落城した。

出雲で尼子氏が滅亡すると、毛利氏は北九州に兵を送って大友氏と対峙した。永禄11年6月、盛重は吉川元春の命を受けて山陰から九州へ渡ったが、その留守中、備後の神辺城と伯耆の尾高城とで思いがけぬ事件が起こった。両城とも毛利氏に叛旗をひるがえした尼子方の国人衆によって奪われてしまったのである。

すなわち、永禄12年（1569）6月に島根半島の千酌に上陸した山中鹿介ら尼子氏の残党が、尼子勝久を擁して出雲奪回に乗り出した。すると、備後の藤井皓玄が大江田隼人介らと力を合わせ、8月3日に兵五百を率いて神辺城を強襲し、城を奪い取った。城代所原肥後守は盛重の妻女や次男の景盛を擁して、辛うじて城外に逃れた。伯耆の尾高城もこのとき、美作から侵入した国人衆によって城を乗っ取られた（雲陽軍実記）（陰徳太平記）ようだ。

しかし、この4日後に神辺城の方は毛利元就の命を受けた楢崎豊景・村上亮康・三吉高亮らの力で回復され、乗取りの張本人であった藤井皓玄は自刃に追いやられた。尾高城の方は城を守り抜いたという異説（老翁物語）もあって、はっきりしないが、いずれにせよ間もなく旧に復したようだ。

元亀元年（1570）1日、毛利氏は輝元を総大将とする1



山手三宝寺銀山城主杉原一族の墓

万3千の援軍を送って、布部山で6千8百の尼子軍と戦い、危局にあった富田月山城を確保した。そのあとは、坂道を転がるように尼子党は敗走を続けるのだが、この年10月、盛重は末次城に攻め寄せて鹿介の軍勢を撃破している。そして、元亀2年になると、吉川元春は伯耆の末石城に鹿介を攻め、降伏して来た鹿介を盛重の居城尾高に幽閉している。

このとき、自分の股に刀を刺して血を流し、赤痢を装った鹿介が一晩中、百回近くも厠に通って、番兵の油断を見澄まし、城外に脱走したという有名な話がある。これは盛重が城中から密かに新山城の尼子勝久へ送った鹿介の密書を手に入れて、その叛意が歴然としているのを知り、元春に誅殺を進言しようとした矢先のことといわれる。

かくして、鹿介と盛重の宿命的な対決が終わるのは、天正6年(1578) 7月4日、播磨の上月城で、力尽きた山中鹿介が主君尼子勝久と共に毛利軍に降伏を申し出たときである。

この上月城合戦で、鹿介は城兵を盛重の陣地に忍び込ませ、城兵を苦しめていた盛重方陣地の台無鉄砲(大砲)を谷底へ突き落とすという離れ業を演じて、盛重の面目を失わせている。

「かかる忽諸(こつしょ)して、台無を盗まるる事、盛重生涯の面目を失ひ、身後の恥辱也。此鉄砲取返すを得ずば、吾当城を枕として討死せん」

『陰徳太平記』にあらわれた、盛重の心境である。

杉原一族の終焉

杉原盛重が伯耆の八橋城内で病死するのは天正9年(1581) 12月25日、山中鹿介幸盛との宿命的な対決が終わって4年目のことである。

八橋城は杉原氏の抱え城の一つであるが、もとは尾高城と同じく行松左衛門尉正盛の居城。大永4年(1524)に尼子氏に奪われ、その配下の吉田氏の居城となったが、永禄8年(1565)になって毛利方の三村家親がこれを落とした。杉原氏が毛利氏からこの居城を与えられたのは、そのあとである。

盛重が尾高城を嫡子の元盛に譲って、この八橋城に移ったのは天正6年(1578)の頃で、この年、伯耆羽衣石城の南條元続が毛利氏に背いて山陰経略を進める織田方についたからである。

今、八橋城跡は国鉄山陰本線に分断されて、当時の面影はない。八橋駅で下車すると、すぐ目の前の鉄道線路を狭んだ2つの丘が、その城跡である。

盛重には前妻との間に、前に述べた嫡子弥八郎元盛・二男又次郎景盛のほか、三男に少輔五郎重信(景保)があり、外に2人の女子があったようである。③

盛重が病死すると、遺骨は八橋の泰玄寺と尾高の観音寺と手間の大安寺に分骨分祀された。尾高の観音寺と手間の大安寺には、それぞれ杉原播磨守盛重の供養塔がある。

盛重の死後、尾高の泉山には嫡男の元盛が居住し、八橋の大江城には二男の景盛が住んだ。ところが、二男の景盛は兄の元盛が羽柴秀吉と通じていることを理由に、天正10年10月26日、元盛とその二子を殺害した。景盛はこれによって尾高を手に入れ、尾高の

杉原盛重の供養塔
(尾高の観音寺墓地)

佐陀に砦を構えたが、今度は吉川元長が、この景盛が羽柴方の南條氏と通じていることを理由に佐陀城を包囲し、かれを自刃に追いやった。天正１２年８月のことである。

羽柴方の南條氏は、このとき伯耆の八橋城をも領有していたが、これは天正１０年の６月に織田信長が本能寺で光秀に討たれたあと、秀吉と毛利輝元との間に和議が成立し、「山陰は伯耆八橋の川を境とする」という取り決めがなされたからである。八橋城はこのときから羽衣石城主南條元続の持城となったわけだ。したがって、それまで八橋城主であった杉原景盛が城を追われることになり、尾高城を手に入れたいばかりに、兄の元盛を謀殺したのだと推理できる。

杉原氏が取り潰されたあと、吉川元春は尾高泉山城に二男の広家を入城させ、伯耆半国と出雲の能義郡を与えて十二万石の領主とした。一方、備後の神辺城は毛利輝元がこれを没収して、毛利氏の直轄領とした。しかし、毛利氏は杉原氏に名跡の存続だけは許して、盛重の三男重信に千四百貫（三千石とも）の所領を与えた。これが、吉川広家の家臣で、少輔五郎景保と名乗る人物である。

（註）①

『福山市史・上巻』や『広島県史・中世』によると、杉原理興を民部丞為平の子孫とし、山手銀山城主を「匡信―理興―盛重」としているが、これは『閥閲録』杉原与三右衛門の項にある系譜書や山手三宝寺の過去帳に「当村古城主、元祖杉原匡信、二代杉原理興、三代杉原盛重」とあることを根拠としているようである。しかし、杉原匡信の没年は弘治２年６月１６日であり、そのあと杉原盛重とのあいだに、この理興が城主として介在したとはとても思えない。『西備名区』『福山志料』の記述および『神辺町史・上巻』所載の杉原氏系図等により、杉原理興は府中八尾山城の出自とするのが妥当と思える。

（註）②

毛利興元の娘が杉原盛重の妻となったことは『毛利弘元子女系譜書』（毛利家文書１９１）に、「興元　御かみさま高橋様之御五もし」とあり、続けて、「御五もし、初は山内（豊通）へ御座候、其後竹原殿（小早川興景）へ御座候、其後杉原殿へ御座候、其後同盛重へ御座候。御次男幸松殿」と記載されていることによって、ほぼ明確である。なお河合正治氏は、この女性が小早川興景のあと行松氏に嫁し、そのあと杉原盛重に嫁したとしているがその根拠は不明である。

（註）③

『神辺町史・前巻』所載「杉原氏略譜」によると、杉原盛重は山手銀山城の出自となっており、盛重の子女はつぎのごとくである。

盛重
- 女　河口刑部少輔久氏妻
- 元盛（又太郎）
- 景盛（又次郎）
- 女　吉田肥前守妻
- 景保（少輔五郎、一つに重信）

【参考文献】

『毛利家文書』『萩藩閥閲録』『福山志料』『老翁物語』『陰徳太平記』『備後太平記』『雲陽軍実記』『安西軍策』『備陽六郡志』『西備名区』『西備古城記』（この書は元禄８年に、備後国甲奴郡上下村の丹下高藤与左衛門尉が調えたもので、内容は備後古城記と類似している）
『神辺町史前巻』『福山市史上巻』『神辺城をめぐる武将』（神辺の歴史と文化第十号）　及川儀右衛門『毛利元就』
藤岡大拙『杉原盛重』（続・山陰の武将に掲載）
遠藤忠『杉原盛重について』（米子北高論集「北斗」に掲載）
松本興『続尼子時代史探訪』